5 MAY, 1990
平成2年(1990年)5月10日　教皇様の殿　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
毎月10日発行　第121号

教皇様の殿

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

司祭の養成

―シノドスについて―

マリアは御子の司祭職を準備した

★今日のお告げの祈りの集いでも、世界代表司教会議について考えましょう。十月に開かれるこの会議では、司祭の形成について討議されることになっています。世界代表司教会議の討議はキリストの光の中でのみ進展します。

事実、キリストは唯一永遠の司祭です。カトリック教会の司祭は、キリストとひとつにさせる霊的なしるし、すなわち「印象」を受けて、キリストの司祭職に与ります。司祭はいつもその役務をキリストの名において、キリストの権限を通して行います。そのため司祭はとくにもう一人のキリスト「もう一人の司祭キリスト」と言われます。

★キリストの到来を待ちのぞむ待降節には、私たちを聖化し救うために送られる神の御子・完全で理想的な司祭の到来を祝う準備をしています。

お告げの時に天使は伝えました。聖霊が臨み、お生れになる御子を聖なるもの・聖別されたものとなさると。聖霊は、イエズス・キリスト、メシア、救い主(注油された者)、特別な聖別を受けた御方において、全ての司祭の源となる最初の司祭としての聖別が実現しました。司祭の叙階式で、その人の全存在の深みにまで浸透する聖別に効力をお与えになるのはこの聖霊です。聖別を受けて司祭は、キリストに一致し、王国の奉仕を委ねられます。

★このような聖霊の重要な働きを考える時、マリアの協力の値打ちを忘れてはなりません。特にイエズスを養育されたナザレトの隠れた生活でのマリアの協力を忘れることができません。マリアは御子の人間としての特質や素質を育み、御子が司祭としての使命にむけて準備なさるのをお助けになりました。のちにイエズスは、温和で謙遜な心、優しく善意に満ちた開かれた心、苦しむ人への思いやりに満ちた心を示され、成長の実りを人々の目に示されたのですが、そこにはマリアの隠れたすばらしい協力があったのです。

★このような事実から、司祭の形成が、まず第一に聖化を実現する聖霊の働きによるものであることがわかります。聖霊は、未来の司祭がキリストにかたどられて神の人となるように準備なさいます。そしてこの形成にマリアが協力されるのです。司祭が社会関係において愛を実行する時に表れる人間としての特性や素質を育み、どのような状況にも入っていくことができるようになるにはマリアの助けが必要です。

待降節の間に、司祭職の源をキリストの内に見出すことができるように、来るべきキリストに心を向けましょう。世界代表司教会議を照らす光としてキリストを見つめ、キリストの模範が、司祭になるべく準備をしている人々の中に反映され、新たにされるよう、キリストに願いましょう。

(八九・十二・十)

司祭職養成には信仰が必要

◇(…)信仰が弱く、ぐらつき生の前に、信じた方は幸せと宣言された聖母マリアに助けを願いましょう。マリアの信仰において、イスラエルの期待は頂点に達し、実現したのです。

◇司祭職を志す人々の形成において何よりもまず大切なのは信仰です。信仰の徳は全ての人に必要ですが、とりわけ(みことば)を宣言する使命を担う司祭にとっては不可欠です。福音のメッセージを自らが身につけていなければ、それを効果的に伝えることはできないでしょう。司祭は働きと全生活で信仰を証するように求められています。御聖体を祝し、秘跡をとり行う時、司祭は自らの信仰を示します。司祭として司牧に携わり、人々と交わる時司祭は人々の信仰を支え、疑問や反論に答え、悩む人や迷っている人々を力づけなければなりません。

司祭に助言を求めたり、直面している困難を打ち明けたりする時、人人は簡単で常識的な答えではなく、信仰に基づく言葉を期待しています。司祭のうちに信仰の態度を見出すことができなければ、がっかりするでしょう。逆に、司祭のうちに信仰の証を認めることができれば、確かな力を得るでしょう。

◇全ての司祭が、キリストの共同体の中にあって、信仰を鼓舞する人でなければなりません。これはとても尊い使命であると同時に重大な責任でもあります。これに向って慎重に自らを準備しなければなりません。従って神学校では、啓示された真理(教理)をしっかり教え、若い人たちが信仰の対象を深く理解できるよう指導しなければならないのです。

また、司祭職の準備においては、信仰教育が施されなければなりません。福音を宣言する召しだしを受けた若い人々は、受けた召しだしを信仰のうちに発展させなければならないのです。種々の勉強は信仰に鼓吹されているべきなのは当然ですが、同時にしっかりと啓示に基づいた一層強い信仰へと導くものでなければなりません。

神の呼びかけに信仰をもってお答えになったお告げの聖母に、司祭の形成を与える職務をもつ人々の信仰の徳を強めてくださるよう、またシノドスにおいて的確な提言が表明され、信仰のうちに未来の司祭の形成が促進されるよう、取りなしを願いましょう。

(八九・十二・十七)

司祭は希望の人

◇クリスマスイブの今晩、キリスト信者の心、全教会の心は期待に満ちています。希望に満ちた期待です。いま私たちは、キリストがこの世の救い主として私たちのもとへ来てくださるのを待っています。キリストは全人類を改心させ刷新させる霊的な力をもって来られます。私たちは希望が失望に終らないことを確信しています。キリスト御自身が、希望が最終的に実現することの

保証です。

しかし私たちも、キリストのこの地上での仕事に積極的に参加しなければなりません。キリストは私たちが贖いのみわざに協力するようお望みです。

◇ 信じる人はキリストに全てを期待します。しかし同時に全てが自分にかかっているかのように努力します。これがキリスト信者の希望であり、この希望をもって福音の諸価値に自らを一致させようと日日努力するのです。

この希望こそ、キリストの名において語り、行動する司祭の職務を支えるのです。司祭は希望の人です。司祭の形成という問題を扱うシノドスにおいて、この真理が熟慮されるでしょう。司祭を形成することは、キリスト教の希望を証し、人々の内に希望を強める仕事を担う人を形成することなのです。

◇ この世は希望に渇いています。たくさんの病気に圧迫され、多くの苦難に悩まされています。人間の情念が引き起こす悲惨な出来事や悲しみが至る所に見られ、対立、戦争、葛藤が平和への望みの障害となり、公平な富の分配に対する要求が、傲慢や利己主義の反対にあっています。希望の人である司祭は、善意の人全てを勇気づけ、「あざむかないし」(ローマ5・5)希望、キリストに向い、キリストに全てを求める希望を広めなければなりません。

司祭が、人類の唯一の救い主であるイエズスへの信仰の内に形成を受けるなら、そして悪の力に勝るキリストの勝利より生じる楽観主義をもってこの世を眺めることに慣れるなら、この役割を果すことができるでしょう。希望に基づく楽観主義は決して軽々しいものではありません。それは人々を襲う災難や、よりよい社会を築く上で遭遇する困難を見過すことではないのです。あらゆる悪や困難に勝るキリストの救い主としての御力を土台にした楽観主義です。

シノドスにおいて希望のうちに司祭の形成が促進されるように願いましょう。聖マリアにおいて希望は実現しました。その聖母マリアに倣って、私たちも希望の徳において前進しましょう。(八九・十二・二十四)

「さて私は父のみ前にひざまずこう。…その光栄と富に従ってその霊によって、あなたたちの〈内の人〉を力強く固めてくださる」ように。(エフェソ3・14～16)

このようにキリストの使徒はエフェソ人への手紙の言葉で祈ります。キリストの母マリアと共にいる今、「お告げの祈り」を唱えるために集まった私たちは、使徒パウロのこの話を祈りにしたいと思います。言葉六月はイエズスの聖心の秘義に捧げられています。

ところで、イエズスの母ほど聖心に近い人がいるでしょうか。私たちはマリアと共に御父のみ前にひざまずきます。贖い主の聖心への信心が聖霊の力を通して私たち一人ひとりの中で〈内の人〉を固めてくださるよう、マリアと共に祈りましょう。

聖霊は〈内の人〉を固める

そう、聖霊を通して。

「〈内の人〉を固める」、つまり私たちの心の中で働かれる聖霊の力の意味は、エフェソ人への手紙のなかで説明されています。

「愛に根ざし、愛に基を置くあなたたちの心に、信仰によってキリストが住まわれるようにと願う。…かの奥義の広さと長さと深さとを理解する力を受けるだろう。」(エフェソ3・17～19)

これが出来るのは聖霊だけです。聖霊だけがキリストの聖心のうちにある〈内の人〉の深さを私たちにあきらかになさるのです。

聖霊のみが、人間の心でさえその深さから力を引き出せることを保証してくださいます。過ぎ行くものだけに心を奪われてはならない〈内の人〉、過ぎ去ることのない「愛に根ざし、愛に基を置く」人間の心でも力を引き出すことができるのは、聖霊のおかげです。

主のはしためマリアが私たちの祈りを導いてくださり、私たちの心が唯一すぎさることのない神の愛に根ざし、愛に基を置くことができるよう助けてくださいますように。

ところで、この神の愛はキリストの人間としての御心のうちに示されたのです。

(六・八)

堕落した人間の状態

「罪」シリーズ ⑥

1 「信仰の年」を閉じるにあたって一九六八年にパウロ六世の宣言した信仰告白(クレド)は、原罪についての聖書と聖伝の教えをそっくりそのまま再提議するものとなっています。これに耳を傾けてみましょう。

「われわれはアダムにおいてすべての人間が罪を犯したことを信じる。すなわちアダムの犯した原初の罪行が、万人に共通の人間性を、その罪行の諸結果をになう状態、人祖がはじめにあったような聖性と義のもとに立てられていた状態ではない状態、また人が悪も死も知らなかった状態ではない状態におとし入れたことを信じる。すべての人に伝えられたのは、このような状態に落ちこみ、自分を飾っていた恩恵を奪われ、その自然の力をそこなわれ、死の支配のもとに従属させられた人間の本性であり、すべての人が罪の中に生まれるということはこの意味においてである。したがってわれわれは、トリエント公会議とともに、原罪が「模倣によってではなく出生によって」人間性とともに伝えられること、原罪がこうして「各人に固有のもの」であることを信じる。

われわれはわれらの主イエズス・キリストが十字架の犠牲により、原罪とわれわれ各自が犯すすべての私罪からわれわれを救われたことを信じる。こうして使徒パウロのことばどおり『罪が増したところには、それ以上に恩恵が増した』(ローマ5・20参照)のである。(『神の民のクレド』)

「神の民のクレド」として知られるこの信仰告白に従っていくと、トリエント公会議の教令と同様、聖なる洗礼、まず第一に幼児洗礼へとさかのぼります。「子どもが超自然的恩恵を奪われて生まれたとはいえ、キリスト・イエズスにおける神的生命を持つよう『水と聖霊によって』再生されるため」なのです。

贖いの光

2 誰にでも明らかなことですが、このテキストもまた、罪、特に原罪についての啓示による教義全体が、常に贖いの秘義と密接に結びついていることを確証しています。私たちもこのカテケージスの中で、そのことを示すよう努めましょう。でなければ、人間の歴史の中での罪の実体を十分に理解することはできないでしょう。聖パウロはローマ人への書簡の中でこの問題についてはっきりと述べており、トリエント公

説教・講話・書簡等の抄訳

会議は原罪に関する教令の中で特にこの書簡に言及しています。

パウロ六世は、トリエントの教令に含まれた原罪に関する教義の全ての要素を「神の民のクレド」の中で贖い主キリストの光の下に再提議しました。

3 人祖の罪に関して、「神の民のクレド」は「堕落した人間の本性」のことも語っています。この表現を正しく理解するためには、創世の書第三章に含まれる堕落についての記事に戻るのがいいでしょう。

この中には、神の介入を人間的に提示されたアダムとエバに対する神の罰も含まれています。聖書によれば罪の後主は女に仰せになります。「私は、おまえの苦しみと身ごもりの数を大いにふやす。おまえは苦しみつつ子を生むことになる。おまえは夫に情を燃やすが、夫はおまえを支配する。」(創世3・16)

「それから、男に向かって仰せられた、『おまえは妻の言うがままになり、私が〈食べるな〉と命じた木の実を食べたから、おまえゆえに、地はのろわれる。生きつづけるかぎりおまえは苦労して、地から糧を得るであろう。地は、おまえのために、いばらとあざみを生やし、おまえは野の草を食うことになろう。さらにおまえは、額に汗を流して、糧を得るだろう。土から出たおまえなのだから、その土にかえるまで。ちりであって、ちりにかえるべき者よ。』(同3・17～19)

4 この強く厳しい言葉は、歴史にあらわれたこの世における人間の状況を指摘していると言えるでしょう。聖書記者は、神によってなされた有罪判決であるとすることをためらいません。それは「地の呪い」、すなわち目に見える天地万物が人間に対して反逆し、敵対するようになってしまったということを暗示しているのです。また聖パウロは人間の罪の結果として「被造物ははかなさに服従させられた」と言い、そのために「腐敗の奴隷から解放され」る時が来るまで、「全被造物が今まで嘆きつつ陣痛の苦しみに会っている」と言っています。(ローマ8・19～22参照)

創造の調和の喪失が、目に見える世界における人間の運命に影響を与えています。人間は生計の手段を得るために「額に汗して」働き、労苦につながれているのです。人間の全存在は労苦と苦しみで特徴づけられ、それは、女の産みの苦しみと、自分たちには関わりのないことだと泣きわめく子供も意識しないとは言え、誕生の時からすでに苦しみが始まるものなのです。

(次号に続く)

モンツェラトの聖母

キリスト信者は好んで聖母を〈ステラ・マトゥティーナ〉すなわち〈明けの明星〉と呼んできました。マリアこそ、キリストによる救いに先立って歴史に姿を現し、救いを告げ知らせた方だからです。

バルセローナからさほど遠くないところ、カタローニャ山脈の中にあるモンツェラトの聖母聖堂のマリアを信者たちは昔から〈ステラ・オリエンティス〉、すなわち〈東洋の星〉と呼びならわしてきました。数年前にスペインを訪問したとき、この聖母の前で祈ることができ、大変うれしく思っています。

そこに聖母に捧げられた聖堂が存在したことを示す最初の信頼できる資料は9世紀に遡ることができます。モンツェラトで敬われているマリア像は、それが作られたと言われる12世紀のマリアのイコンの特徴を備えて黒い色をしているところから、〈モレネタ〉という名で親しまれています。

この聖母聖堂は、隣接地に建てられた修道院が大修道院の位に上げられて以来、非常に有名になりました。

幾世紀にもわたり、現在に至るまでこの聖母聖堂は福音宣教と典礼の刷新、聖書の研究の卓越した中心ですが、中でも聖母に拠り所と保護を求める神の民にとって信仰の灯台の役目を果してきました。

しかし、この聖堂が今のように重要な位置を占めるようになったのは、レオ十三世教皇がモンツェラトの聖母をカタローニャ地方の保護の聖人にされてからです。

この地方の信者の間では、モンツェラトの聖母を〈霊的に訪問する〉習慣があります。仕事中に聖堂の方向を向いて潜心のうちに短い祈りを捧げるのです。私はみなさんとご一緒に〈神の御母〉に向って同じような霊的訪問をし、祈りたいと思います。「上知の座、マリア様、山を切り開き、谷を埋め、人生の道を平らにする信仰のうちに、どうか私たちに同行してください。」

強い信仰と公私共に高潔な生活、兄弟愛、人々の一致、善意の人々の平和を〈モレネタ〉の聖母にお願いしましょう。信者のみなさんと全てのキリスト者の家族が、特にロザリオの祈りを通して、篤い心で熱心に聖母の名を呼びますように。聖母はキリスト教の二千年代の暁を迎える教会のため、主キリストから新たな春の恩寵を得てくださることでしょう。

(十一・六)

日曜日の意味

(三月十九日、イタリアのイヴレアにある教会でミサを立てられた。以下はその時のホミリア(説教)です。)

(その地方の司教方の検討されたことに触れて)皆さんがいみじくも指摘されたように、人間的な面から見て、生活のリズムそのものが一週間の仕事の後に休息を要求しているだけでなく、家族全員が一緒に集まり交わるという望みに応えるため、その休息は家族の人々みなのため、できる限り同じ日でなければなりません。同じく人間的な面から見て、日曜日・主の日・教会が典礼に集う日・普段よりも一層深い宗教生活のための日を特に大切にしなければなりません。キリスト信者にとって日曜日は、神だけでなく、人類とその超自然的な価値への信仰を証言する日です。

キリスト信者は日曜日の尊さを守るために働かなければなりません。ですから、世論に、そして契約や法律に影響を与えるため、社会的政治的なちからを支持して、主日を中心とする原理や原則、価値に則った生活のできるよう、努力しなければなりません。

(青年たちとの集いで教皇様は祈りについて話された。)祈るとき、あなたたちは、自己の存在に充分な意味を与えるよう導く神と、親しい交わりに入ります。現代文明のスピードの早い動きの中で、優しい微風にのって語りかける神に聴き入るため、どうしても必要な条件であるにも拘わらず、沈黙の時間がどんどん少なくなってきています。

みなさん、沈黙を愛しましょう。キリストと共に孤独を守ることは決して他から隔離されることではありません。それは、誰のところにも何に対しても神秘的に現存することなのです。

不変の教え

強さと弱さ
(ドイツの司教との集まりで)

1 今回の会合で考えた事柄を要約すると同時に補充するため、再び現在のドイツ・カトリック教会の強さと弱さを振りかえってみたいと思います。強い面を考えるとすぐに思い浮ぶのは、アドヴェニアト、ミゼレオル、ミッショ、カリタスなどの組織です。(…)ドイツでは、繁栄を享受するすべてのキリスト者の、世界に対する生き生きとした責任感が感じられ、それが抑圧と飢餓と貧困に苦しむ人々への情熱的ともいうべき同情となって表れています。また、信者の間に新たなかたちの謙遜が見られ、それは貧しい人たちから学び、そして彼らから〈受ける〉という態度となって表れています。

(…)この普遍的な態度(広い心)と謙遜をさらに深める必要があります。経済的な貢献だけでは満たされない愛の力を躍動させなければなりません。与えるという行為がその深い意味で受けるという行為に等しくなる必要があるのです。物的な援助をするだけの普遍性に大きな意義は認められません。いくら多くを与えても、それは長続きしません。普遍性とは、教会全体と共に考え、教会を越えるものでなければなりません。それはカトリックの精神に支えられ、カトリックの精神を土台にしていなければならないのです。(…)

大きな心・物惜しみせぬ態度の重要性を低く評価するのではありませんが、次の点を考えてみる必要があると思われます。ドイツだけでないが、物的な貢献が増加するにも拘わらず、宣教者の召し出しが皆無と言っていいほどまで減少したのはなぜでしょうか。兄弟姉妹たちが人々のために自らを捧げて仕える召し出し、物的な援助の中心となり心となるべき召し出しが減っているのはなぜでしょうか。司祭と修道者の召し出しは一つの教会が生きているかどうかを示す基準です。これは私たちにとって重大問題です。召し出しの不足という事実が私たちに迫っているのです。

2 ドイツカトリック教会のもう一つの力は、協議会やその他の政治や社会に大きな影響を与える組織が高度に発達していることであると思われます。さらにもう一つは、知的な面での影響力です。ドイツの高等教育機関全体に広がった神学部や教授職を通して、教会は大きな感化を与えてきました。しかし、皆さんの報告や討議の中で指摘されているように、現状を細かく検討するといくつかの危険がひそんでいることも事実です。たとえば、人々を鼓舞することのできたユース・ムーブメントは自己満足に陥り、イニシアティヴをもとにして熱意を保つというよりは、経済的に恵まれた状態に安住してしまい、実りある活動が見られなくなりました。(…)

考えてみれば、外的・経済的な手段だけに頼って存続する組織や制度には、存在する力も値打ちもないことは明らかです。幾人かの参加者が強調されたように、現状を解明した上で、必要ならば思い切って断念することも考えなければならないでしょう。(…)

3 教育の面でも同じことが言えるでしょう。(…)ここでも心配な問題があります。大変な努力が、それに見合った深い信仰の理解と信仰に近づく広い機会となっているでしょうか。前回の集いと同じく今回も、皆さんはこの点に欠陥があることを指摘されました。

なぜ、こうなったのでしょうか。たとえば、学校において宗教教育はどうなっているのでしょうか。成人の教育はどうでしょうか。小教区の要理教育はどこまで及んでいるでしょうか。なぜ大人たちの信仰の基礎知識がこれほど少なく、なぜ教会の中で喜びをみつけることがこれほど少ないのでしょうか。これらの疑問や他の同じような問題に注目し、検討しなければなりません。

それに対する答として、私たち全員が決定的な確信をもっています。すなわち、説教と要理教育を強力に推し進めなければならないということ。よきおとずれ(福音)の中身が、時代の精神に合せなければならぬという理由のもとに姿を変えているようでは、人々に喜びを与え納得させることはできません。福音を時間ばかりかけてひねくり回し、その中身を薄めるようなことをしていては、福音の力を窒息させてしまいます。使徒の教えは今も私たちに道を示しています。「兄弟たちよ、私はあなたたちのところに入って、神の証明を告げたが、それは巧みなことばと知恵によってではなかった。私はあなたたちの中にあって、イエズス・キリストのほかには何も知るまいと決心したからである。(…)私のことばと宣教は人を屈伏させる知恵の雄弁ではなく、霊と力の表れであった。」(コリント①2・1～4)知性の役目を軽く見よというのではありません。「常に答える準備をして」おくべきだからです。(ペトロ①3・15)

しかし聖パウロは、信仰を支える現実を心と精神に留めておかなければ、信仰について語る言葉が虚しくなると教えているのです。

4 ドイツのカトリック教会のもう一つの特徴は国家と教会の諸制度が密接に結びついていることです。教会は社会の多くの分野に入り込み、大きな働きをしています。あらゆる生活面に福音の精神を浸透させてください。

(…)誤った妥協に陥る危険や誘惑を避けてください。人々があやまって教会と社会を同じものと考えることのないよう注意してください。社会で数多くの奉仕の仕事に携わる人は、本来の使命を捨てないよう努力しなければなりません。イエズス・キリストに仕える牧者は、偉大な預言的遺産を忠実に守り、妥協を避け、快くないことをも果す義務を負っています。キリスト信者はできるだけ大勢の人が信仰に近づき、主と親しく交わり、人々の間で生活するにあたり、福音の道徳(倫理)価値の数数を実現するよう一所懸命に努力しなければなりません。しかし、福音に対して不動の忠実を保つにあたり、必要なら少数グループの一人として生きる覚悟をすべきことも確かなことです。昔以上に今日、信仰は現代的と称されるものと対立しています。しかし、この対立こそ、人々の役に立つということを知らねばなりません。対立する勇気こそ、新たな力と新たなエネルギーを手に入れるもとです。こうして私たちは地の新しい塩・世の光となり、(マテオ5・13他参照)全世界のための救いの秘跡となるのです。

とは言っても、よく言われるようなゲットー(隔離されたグループ)に身を隠すことにはなりません。実はその逆なのです。今日の世界の現状こそ、(信仰の時)になりうるものなのです。マルクス主義が落ち目だというだけでなく、若い人たちはもっと鋭く西洋の消費主義を見透し、より偉大な約束を求めています。普遍の価値を有する信仰の偉大さを恐れなく伝えるなら、ある意味で放蕩息子の生活を経験した世代の渇き・熱い望みに応えることができるのです。私たちは恐れず勇敢に信仰の新しさと偉大さを再び人々に示さなければなりません。こうすれば、信仰は再び贖いの喜び、贖われた者のよろこびになることでしょう。特に司祭と助祭、また専門分野のすべての協力者とボランティアに、このような証人となるよう強く勧めてくださいますように。(八九・十一・十四)

『教皇様の声』 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費
■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替 神戸 3-72393